

土曜日の朝、愛犬の散歩に出かける。今日は一人で出かける。サヤカは朝ご飯の支度をして
いる。

いつものコースを歩いていると、色々な人に声をかけられる。

「おはようー。おりこうさんな犬やねー」

おりこうでもなんでもない。ただ、それなりの躰を施しただけなのだ。

人が暮らす環境において、勝手ではあるのは承知だが犬は人間社会のルールの中に取り込ま
れている。

最近ではこの「人のルール」を守れない「人」が増加している。

きつと社会が激しいストレスを生む環境へと変化して行っているであろう。

なんだか、僕もその中の一人のようだ。そんなことを考えていると、ひどく疲れてきた。気
分が悪くなつて来た。

ちようど、東大寺大仏殿の裏へ来た。右手に大仏殿の石垣が続く。

ふと、視線を感じた。犬も何かに怯えているようだ。

吐き気をもようしながらも僕は振り向き、目を凝らしてさつき通つて来た石垣の方を見た。

ラクダシャツにキャップを被ったカレが立っていた。

「これ見てみー。自分やつたら見えるやろー？」

唸るような声で言う。僕はひどく疲れている。カレの言うことなど聞いていられない。

「早う見んかい。グズグズしてたら間に合わへんど！」

カレは石垣のある部分を指差し、ハッキリ言った。僕は倒れそうになりながら、その場を立ち去った。

家に付くと、サヤカが家の前まで出て待っていてくれた。

「余りにも帰りが遅いから、心配したやんかー。」

吐きそうになりながらも僕は精いっぱい笑顔を作った。

「ちよつと気分が悪くなったから、休憩してた」

サヤカは心配そうに僕の顔を覗き込む。

「どうしたの？ 顔色悪いで」

僕は横になりたかった。

そう伝えて少しの間、眠りについた。

誰かが僕に話しかけている。とても興奮しているようだ。

「グズグズするな！ 眼が光を感じるうちに見ておけ！」

どうやらその誰かはカレのようだ。言っている意味がよく分からないが、とにかくすごい剣幕で責め立てる。

でも、その声に苛立ちを感じていない僕はどうかしてしまったのだろうか？

体がとても軽く感じる。地に足が着いていないようだ。

カレのことなどどうでもよくなった。そのまま、そう、まるで5ミクロン体が浮上したような状態で、あの場所へと滑り込む。

サヤカだ。あの時と同じように僕を待っていてくれている。眩しい太陽と白い砂浜が、魂の平穏を与えてくれる。

#11

ベットから起き上がると窓の外は暗かった。時計を見ると零時十分を過ぎていた。

サヤカは隣で寝息をたてている。

最近の僕はどうかしているようだ。このままではいけない。本当の自分を取り戻さないと

けない。

サヤカの絹のように滑らかな髪が僕の顔の前にある。よい香りがする。

熱くなるのを堪えきれず、サヤカの胸に手を伸ばす。気付いたようだ。

彼女もそれに応えて来た。そして激しい時間がお互いを狂わせる。最後はサヤカが上になり儀式が終わる。

朝、僕達は抱き合いながら目覚めた。

今日も良い天気になりそうだった。僕の体もサヤカの体も仄かにお互いの唾液が乾いた匂いがした。

お互いを求め合った証だ。イヤな匂いだとは思わない。このまま外に出ても恥ずかしくない。安心感さえ感じる。

自我に目覚めてから親にも見せたり触らせたりしたことのない器官同士を擦り合わせる。こんな凄惨なことはないと思わないか。

そして、相手から分泌される液体を全くもって汚いと感じない、逆に自ら進んでそれを口にしたりする。

これは愛以外の何者でもないと言断する。

朝食を摂り、犬の散歩に出かけた。いつものコースを行く。カレが指差した石垣が気にならないというのは嘘になる。

夢だったのかもしれない。そんなことを考えながらいつもの石垣の道を歩いていると、一番下にある石が気になった。

一つだけ異様に乾いているように見える。ベージュ色のそれは苔のむす他の石とは異なる。足を止め観察してみた。隅々まで確認したかった。隣の石との隙間までも確認してみる。

カマドウマが身を潜めていた。蜘蛛の巣もある。反対側の隙間にも目をやる。すると焦茶色の細かな溝が見えた。

よく見るとどうやらその焦茶色は朱色が劣化したもののように見えた。

その溝は、自然の造形物ではないと直感した。所々が少し欠けてはいるがあまりにもシャープなエッジを形成している。

何か模様のようなものが刻まれていると思う。それは一体何をあらわしているのだろうか。まだまだ時間はある。

溝の一つ一つを目に焼きつけておこう。

家に帰り、サヤカに今朝のことを話した。石垣と乾いた石のこと。カマドウマがいたこと。サヤカも少し興味があるようだった。目をまん丸にして聴いていた。

「その石に刻まれていた模様を紙に描いてみてよ」

僕は全てを正確に描き出した。そして冷静に眺めてみると古い中国の漢字に見えて来た。

『富羅王』 どうやらそう読めそうだ。その両横には四つ足の動物が抽象的に描かれているように見える。

『富羅王』？ どういう意味なのだろうか。また両横の四つ足はなんだろうか。

「子豚みたい」サヤカは笑っていた。

確かにその子豚を見ていると増々子豚らしく見えて来る。

可笑しくなって二人で笑っていた。

愛する人と笑っている時は本当に幸せだ。

そんな幸福感を噛み締めながらベッドに入る。

子豚のこと、富羅王の意味を考えているうちに眠りに墜ちて行く。

「子豚やあらへん。それはお前やど！」

また、カレが現れたようだ。夢と分かっているとなんとも平気で居られるようになった。

一度、カレと話し合ってみようじゃないか。夢の中で。

「子豚じゃなかったら何なんだい？ 君は一体僕に何を伝えたいんだい？」

カレは呆れたように言う。

「子豚じゃなくて、あれはお前や。早く思い出してほしいんですよ。扉のことも」

扉のこと？ 一体何を思い出せと言うのか？

カレは続けて言った。

「お前には、過去がある。それは決して消せない。特にお前の場合は絶対に消すことはできへん。自ら消そうとした者ほど、永遠にその呪縛から逃れることはできぬ」

なんだか可笑しくなってきた。夢の中とはいえ、カレは相当キテいるようだ。次は僕から意地悪な質問を試してみた。

「君の過去はどうなんだい？ どうやら君は仕事もしていないようだね。そんな君の過去はさぞかし立派なんだろうな」

カレは黙ってしまった。そして眼が泳いでいるように見えた。

僕は申し訳ないことを聞いてしまったと思い、ほんの少し罪悪感を抱く。

そして暫くしてからカレは言った。

「オレの過去はお前と共にあった」

その時、カレは科学者が着るような白衣姿で立っていた。

続く